1969.10.23 明治大学新聞

一般学生どこへ行く

ロックアウトをこう見る

早く学園に戻りたい

―ロックアウト― 寄せる思いはさまざまに

九日の機動隊導入、ロック・アウト以来、はや十日あまり。かつてのバリケートはベニヤ板のヘイにかわり、たて籠っていた学生は教職員に姿をかえた。当夜、うらめしそうにヘイを見上げていた"一般学生"も、このところメッキリ減り始め、各校舎周辺は何かしら物寂しい空気。対立する大学当局・全共闘の中間にあって独自の道も歩めず、かといって流れに逆らうこともできずに傍観、あるいは逃避する一般学生はこの事態をどうとらえたのであろうか。本紙では駿河台、和泉、生田の各キャンパス周辺に居合わせた一般学生を対象にその胸中をルポしてみた。正常化はいつの日か――。

本校 卒業はしたい

【錦華公園にて】 翌二十一日の"国際反戦デー"に備えて機動隊員が入園者チェックのため、モノモノしく入口を固める錦華公園読書中のA君（法四）は当局の措置についてこう語る。「まったくの治安的見地からのロック・アウトですからネー。弾圧反対ですよ」。四日の全学集会なども粉砕されることを予想したまったくのポーズにすぎないと手厳しい。しかし、今後のあなたの行動は、と問うと頭をかかえこんでしまった「授業再開になったら授業にはでます。やはり卒業はしたいですからネ」――。四年生の立場は微妙でもある。

【喫茶店Hにて】 ロック・アウトによって部室を締め出された各サークルは、目下喫茶店を根城に活動中。K研究会のB君（政経三）もその一人。今後の方針をみんなと話し合っていた。記者の質問に同君は「全く言語道断です。学生大会で合法的に決定されたストライキを機動隊の導入によって弾圧し、ロック・アウトの措置を取った当局を徹底的に糾弾していきたいと思います」と答え、"心情全共闘"ぶりを披露する。さらに今後の行動については「授業が再開されても大学立法反対の闘いは続けます」と強調。しかし全共闘もバリケードをあまりにも私物化しすぎたような気もします」と全共闘批判も忘れない。

【本校学館前にて】 ベニヤ板のヘイのすきまから中をのぞこうとしていたC君（商四）はロック・アウト支持派。「全共闘はああなると暴力団の出入りのようなものでしょう。今回の措置は妥当だと思います」。学生の授業料で運営されている私立大学は、破壊がすぐ自分自身の損失としてふりかかってくるから一部の学生による学園破壊はまったく許せないと同君は言う。「もち論、全共闘と一体である中執もこの機会にリコールしたいですよ」。ロック・アウト期間中は読書をして過ごすとのこと。

【お茶の水駅前にて】 ゼミの会合の帰りだというD君（文三）「ちょうど、今そのことをみんなで話し合っていたところなんですよ」と前置きして次のように語った。「今回のストは表向きでは大学立法粉砕、六項目要求ということでしたが、実際には十一月決戦に向けての拠点づくりに他ならなかったと思うんです」。大学当局はむろんのこと、全共闘側も話し合う気持ちは初めからまったくなかったのではないか、と同君はどちらにも批判的。「しかし、当局のロック・アウトの措置はナンセンスですよ。今後の事態がますます悪化するばかりだと思います」今日の会合では今後の方針を出すまでにはいたらなかったそうである。「このまま学校ペースでずるずるいきそうですネ――」と改札口の雑踏の中へ吸い込まれていった。

喫茶店で集合して今後の方針討論（Sゼミ・喫茶店丘にて）

和泉 留年の心配ない

【明大前駅（京王線）にて】 退社・退学時とあって往来が激しい駅前周辺だが、本学生の姿はまばら。ベンチに腰かけて話し合っていた数人にグループ・インタビュー。ロック・アウトには反対というE君（文二）。警察権力の恫喝の結果とられた措置であるとする同君は「直接学校を非難するのは当らないでしょうネ。批判の対象があるとしたら、それは国家権力、つまり政府です」と評した。今後は団交などにも進んで参加していきたいと積極的。学生の提起した諸問題が未解決のまま授業を再開しようとするやり方には強い難色を示す。「留年の恐れも出ているが――」と問いかけてみると「私大ですからね―、余り心配はしていませんヨ」と楽観的な返事が返ってきた。

また、同じサークルのメンバーというF君（法二）は、どちらかというとノンポリ型。機動隊導入、ロック・アウトには反対の意向だが、「ストに入って一番損をしたのは俺達"一般学生"ですよ」とストライキ自体にも困惑気味。「授業再開になっても学生と教授との間のコミュニケートが失なわれた現在、当局との話し合いには参加する意志は毛頭ありません」と言い切った。これからは、サークル運動に身を入れたいと語る中に、どことなく無力感が漂っているのが感じ取れた。

【和泉校舎前にて】 ここも人影はまばらで訪ずれる人も少ない。ぶ厚い経営学の本を片手に、横目でロック・アウト光景をにらみながら帰りかけたG君（経営二）は、間髪を入れずいきなりこう言った。「いやあ、失望しましたネ。学生の手による自主解除をやろうとしていた矢先だけに、われわれの努力は完全に踏みにじられた感じがしてなりません」と当局に対する怒りをぶちまける。「目下、自治連合を足場にして是非とも早急に学内正常化を図りたいと考えていたんです」と語る中に、今後の行動をロック・アウトによって封じられた挫折感が感じられないでもない。「一刻も早くロック・アウトを解いてもらわない限り全くお話しになりません」と悲壮的な一面すら見うけられた。

生田 また田舎に帰る

【生田駅（小田急線）にて】 生田校舎にやってくる学生もまったく少ない。やっとつかまえたH君（工一）はロック・アウト後、初めて同校舎に来たという。「イヤー、驚きました。すっかり校舎がベニヤ板と鉄条網で囲まれてましたよ。いったいどうしたわけですか。新聞でチョット読みましたがだいぶ続くらしいですネ」。全共闘についても別に意見はないとのこと。「一昨日、上京したばかりなんですが、これからまた田舎に帰ってバイトをしますよ」――"ロック・アウトどこ吹く風"であった。

【生田校舎付近の踏切にて】 散歩がてら校舎を見ての帰りという三人連れに声をかけるとすぐに「当局の措置は時期尚早だと思います」と答が返ってきた。本校は致し方ないとしながらも和泉・生田地区のロック・アウトは疑義あるところらしい。「たった一回の全学集会をしただけで、この事態とは短絡ですよ」と、しきりに当局のあせりを指摘するのは農学部三年のI君。しかし一方では、「当局が農学部再編に真剣に取り組む意向なら授業再開に応じてもいいんですが」と柔軟な面もある。他の学部と異なって農学部は再編問題という独自の問題をかかえているだけに学生の反応も微妙のようだ。

また、本紙にも[illegible]問い合わせの電話が多い。いずれもいつから授業が始まるかという質問であり、バリストにもロック・アウトにも全く無関心である。しかも母親から直接の問い合わせが多いのも一つの特徴であった。

――以上、ロック・アウトに関して一般学生の意見をいくつかひろってみたわけであるが、総体的にみて卒業を控えた四年生にロック・アウト支持派が多く、二、三年生に反対派が多かった。また、一年生はどちらかというと無関心層が多いようである。

当局批判の中で特に多かった意見は「まったくの治安的見地から機動隊を導入したのではないか」という意見であり、そのほとんどが「これによって当局の話し合い路線はポーズにすぎなかったことがわかった」としている。ロック・アウト賛成派の中では「当初はストを支持したが、全共闘があのようにハネ上ってしまっては今回の措置も止むを得ないであろう」という意見が大勢を占めていた。また、賛成派の中に「中執のリコール」を唱えるものがかなり多いことも注目に値するようだ。その理由として"①正規の学生大会が開かれていない②議題が不明瞭③全共闘と一体である"などがあげられている。いずれも共通していることは早くロック・アウトを解除して学園にもどりたいということである。

しかし、ストライキをきめこんでいる一般学生はまだまだ多い。ロック・アウトという非常事態も"夏休みの延長"でしかあり得ないのであろうか――。

（[illegible]）